スタディプロモーションチーム報告

１　スタディプロモーションチームについて

令和５年度より、研究委員公募による共同研究を『スタディプロモーションチーム（以下、スタプロ)』として活動を開始した。スタディプロモーションとは、「学びを推進する」という意味である。学校で抱える健康課題等について、支部や校種を越えた研究委員公募による自主的な共同の研究活動を通して、共に学び、深めながら、自身の力量の向上と研究の推進を目指すことを目的としている。

２　今年度の研究活動

研究を進めるにあたり、学校保健や養護実践等の様々な分野の論文を各研究委員が持ち寄り、交流する中で研究方法や評価方法等について学んだ。このような活動を経て、研究委員それぞれが執務の中でどのような実態があり、その中でどのような課題を感じているのかを話し合ったところ、「性に関する指導」や「生命の安全教育」に関する意見が多く出た。それを受け、研究を通して何を明らかにしていきたいかを各自研究構想シートに書き出していくことから今年度の活動がスタートした。

（１）研究構想を練る

ア　日本養護実践学会　第７回学術集会への参加（７月）

実践研究の進め方を学ぶために、研修会に参加し、以下の３つのことを学んだ。

・実践研究は、今実践していることで、かつ課題や疑問を抱えているものが研究しやすい。

・実践研究における取組については具体的に考える。

・実践研究は、執務の中で実践に基づいたデータ収集が可能であるため、研究で得られた結果が根拠となり、執務に役立てることができる。

ワークショップでは、まず、養護教諭として日々、取り組んでいることや、取り組んでいきたいと考えていることを書き出した。その中で、特に子どものために問題解決したい内容について、大学教授等の研究者から助言を受けながら仮説を立て、仮説を検証するための方法について考えた。何を明らかにしたいのかを明確にすることで、実践を研究的な視点から捉えることができた貴重な機会となった。

イ　研究構想を作成

まず、各研究委員が作成した研究構想シートの交流を行い、研究の大枠を「生命の安全教育」に決定した。スタプロとして研究を進めるにあたり、研究動機と研究で明らかにしたいことをさらに明確化するために、生命の安全教育の概要やねらい、指導内容を再度確認することにした。これらを踏まえ、実態を交流する中で、教職員研修の内容や有無、指導者（養護教諭が T2 となる取組等）や、学習者の特性や心理的要因等によって、同じ教材を使ってもそのねらいの達成に差が出るのではないかと考えた。その中でも特に、子どもの心理的要因の影響が大きいのではないかと考え、どの心理的要因が影響するかを検討した。親や周囲の人に大切にされた子どもは自分の心と体を大切に思えるのではないか、また、自分を大切に思える子どもは、自信を持って他人と関わることができ、他人の心と体も大切にできる行動が取れるのではないかと考えた。このように「自分は大切な存在だ」「自分はできる」という感情を指す自尊感情に着目し、子どもの自尊感情の度合いによって、生命の安全教育のねらいの達成に差が出るのではないかと仮説を立てた。研究仮説を確認するための研究手順、検証方法を検討し、研究構想シートにまとめていった。

（２）研究構想についての指導・助言（10 月）

作成した研究構想シートを基に、オンラインで金沢大学　森　慶惠教授から以下の３点について指導・助言をいただいた。

・研究を計画する際、『メーガーの３つの質問「①どこへいくのか（目標）」「②たどり着いたことをどうやって知るのか（評価）」「③どうやってそこへ行くのか（指導）」』が指針として考えやすい。

・評価は「子どもの変化を捉える＝見える化」することである。見える化の方法はテストやアンケート、インタビュー、記述内容の分析等様々である。子どもたちにどのような姿になってほしいのかをもとに、知識、意識、行動等、どの視点で評価するのかを絞って考える。

・研究動機、研究対象者、使用する心理的指標、尺度等は、この研究をする上で関係あるものなのか、先行研究や公的機関の情報等を基に根拠あるものとする。

（３）研究構想の再検討

森教授の助言を受け、「研究仮説（目標）が本当にこれでよいのか」、「子どもにどのような効果・変化をもたらしたのか（もたらさなかったのか）について何をもって測るのか」、そして、

「自尊感情が生命の安全教育に関連があると捉えた根拠は何か」を再検討することとなった。

助言を受けるまでは、生命の安全教育が目指す姿に最も近づけるのは「自分を大切にできる」子どもではないかという漠然とした仮説があった。今回の助言から「自分を大切にできる＝自尊感情が高い」と安易に設定していたことに気づいた。そして、再度「自分を大切にできる」とはどのようなことか、その状態をどのような心理的指標や定義で表すことができるのかを各自がまとめ、その根拠となる論文や研究について出し合った。検討した結果、この研究における「自分を大切にできる」状態にある心理的指標は、自己存在感と設定した。さらに設定した自己存在感が、生命の安全教育のねらいの達成と関連すると考えた根拠となる論文や研究を共有し検討した。

３　今年度のまとめと次年度に向けて

今年度のスタプロの活動では、研究を進めるにあたって以下の４つのことを学んだ。

（１）研究テーマは身近な疑問から設定することが望ましい。

日々の執務の中で抱いている疑問や課題を研究対象とすることで、研究の動機が具体的になる。さらに、明らかにしたいことやどのように見取るか等、研究構想を具体的に考えられ、研究計画を立てることができる。

（２）事前学習により研究の質向上につながる。

活動毎にスモールステップで次の活動目標をもつことで、研究委員が各自で調べたり、学んだりして活動に参加し、研究を進めることができた。そうすることで、互いの研究の基礎知識が共有され、研究チーム全体の理解が深まることが分かった。

（３）研究を始めるには十分な事前の計画が不可欠である。

関連文献の調査や研究計画の立案が最も重要であり、これにより研究の方向性が明確になり、効率的に進めることができる。

（４）根拠や定義を明確にする。

曖昧な研究動機にならないように、実際のデータや先行研究を基に根拠のある実態把握を行う。また言葉の捉え方は様々あるため、関連文献や先行研究を基にこの研究において使用する言葉の定義を明確化する。

今年度は研究構想シートを活用した計画の作成に重点をおき活動を進めてきた。来年度は、研究仮説を検証するための手順を策定し、具体的な研究を進める予定である。